様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５３０７３１

研究課題名（和文）障がい児家族ケアラーのストレス対処力ＳＯＣ支援向上モデルの構築

研究課題名（英文）Fundamental research towards the construction of Sense of coherence improvement model for family carer with disabled children

研究代表者
大宮　朋子（OMIYA, Tomoko）

筑波大学・医学医療系・准教授

研究者番号：９０５８９６０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：育児や介護を担う家族ケアラーとして、先天性障害児（口唇口蓋裂児）の母親と、高校生を養育する母親を対象とし、ストレス対処力SOCの関連要因を探索した。障害児の母親にとって、気持ちを分かってもらう経験や医療従事者からの丁寧な説明が、高いSOCや肯定的変化の獲得と関連した。「周囲の人からの辛い言葉」は、SOCの低さと有意な関連を示した。高校生の母親は、ｿｰｼｬﾙｷｬﾋﾟﾀﾙや家族関係の良好さがSOCの高さとプラスの相関を示した。また、子どもの自閉傾向の特性と、子どもに関する悩みがあることがSOCとマイナスの相関を示した。

研究成果の概要（英文）：As a family carer responsible for child rearing and nursing care, we conducted a study to find relevant factors of Sense of Coherence for mothers with congenital disorder (cleft lip and palate) and mothers raising high school students.
For mothers with disabilities, experiences of sharing feelings and polite explanations from health care workers were associated with high SOC and perceived positive positive change under adversity. " Stigmatic words from the surrounding people" showed a significant association with low SOC. For high school students' mothers, good family relationships and social capital showed a positive correlation with high SOC. In addition, the characteristics of child's pervasive developmental disorder tendency and existence of troubles concerning children showed a negative correlation with SOC.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：障害児　母親　ストレス対処力　Sense of Coherence　子ども　ケアラー　高校生　親子

１．研究開始当初の背景

厚生労働省の調査によると、わが国における在宅の身体障害児数はおよそ 93,100 人と推計され（平成 18 年）、前回調査（平成 13 年）と比べて増加し、年々重症化している。（国民衛生の動向，2010）。一般に、在宅介護者は身体的ならびに精神的不調や疲労を訴えることが多く（山口，2005）、介護者の 4 人に 1 人は抑うつ状態にあるとされている。中川(2010)は、育児（健常児・障がい児）や高齢者の介護をする家族を「家族ケアラー」と呼び、ケアの内容や対象者の身体的状態に関わりなく、家族ケアラーはケアをすることにより追い詰められることを報告した。家族ケアラーについては、これまでストレッサーの特定やその軽減・除去に着眼した、疾病生成論的アプローチを主要テーマとした研究が蓄積されてきた。一方、「健康はいかにして回復され、保持され、増進されるのかという観点からその要因（健康要因：salutary factor）の解明と支援・強化をめざす、健康生成論（salutogenesis）的アプローチ」については近年着目されてきたが、研究の蓄積は十分ではない。

健康生成論的アプローチは、A. Antonovsky (1979)によって Sense of Coherence（首尾一貫感覚、以下 SOC)として概念化され、ストレスに成功裏に対処する力として位置づけられている。SOC は有意味感、把握可能感、処理可能感の３つの下位尺度によって構成され、人生満足度やウェルビーイング、Hope や自尊感情と関連を持ち、ストレス状況からの回復や健康状態の維持・増進に対して予測力を有することが示されている。また、SOC は疾患関連の情緒的な問題について成功的対処を導く重要な因子であり、SOC が高いこととコーピング能力が高いことには有意な関連が認められ、SOC は成功に帰結するコーピングの源であるということが示されている。

家族ケアラーの身体的・精神的状況が、ケアの受け手の人生・生活の安寧（QOL）、疾患の悪化・回復などの予後、人格や精神健康にも影響を及ぼすという報告は少なくない。従って、家族ケアラーが上手くストレスに対処し、心身の健康を保つことは重要な位置づけにあると言える。また、ストレッサーを軽減・除去する視点に加えて、「高ストレス状況にあっても、うまくいっている人は、何故うまくやることができるのか」といった健康生成論的アプローチから具体的な示唆を得ることが、極めて重要であると考えられる。特に、家族ケアラーがストレスフルな状況に成功裏に対処する力をつけていくための支援を行うこと、すなわち SOC 向上への支援を視野に入れ、高い SOC を持つ家族ケアラーに特徴的な経験とは何か、あるいはどのような環境が SOC を育むのかを明らかにすることは重要だと考えられる。

２．研究の目的

A. Antonovsky によって概念化されたストレス対処力 SOC を用いて、家族ケアラーとして【研究１】先天性障害児の家族ケアラー、【研究２】高校生を養育する母親を対象とし、彼らの主観的経験や環境や対処資源が、SOC とどのような関連性があるのかを明らかにし、SOC 向上支援に向けての示唆を得ることを目的とした。

３．研究の方法

【研究１】口唇口蓋裂児の家族ケアラーを対象とした研究

（１）調査研究のプロセス

口唇口蓋裂児の親が運営するセルフヘルプグループである口唇・口蓋裂友の会（口友会）の協力を得て、14 名の先天性疾患児を持つ親（母親 13 名、父親 1 名）に対しインタビューを行った。インタビューでは SOC-13（5 件法版）を測定した。

分析の結果、配偶者、義両親、医療者からの忘れられない（辛い）言葉の有無、重要他者からサポートを受けたという実感の有無、生活拠点である地域への信頼と暮らしやすさが、SOC の高低に関連する可能性が考えられた。また、時間の経過と周囲の支えによって、「この子を産んだからこそ得たものがある」という思い（Perceived Positive Change）に至ることが分かった。これらの結果は、質問紙調査に反映させることとした。

（２）対象と方法

・調査期間：2014 年 7-9 月
・調査対象：口友会の母親会員 514 名
・調査方法：郵送法を用いた無記名自記式質問紙調査
・分析対象：有効回答数 296 名（回収率 57.9%）

（３）倫理的配慮

調査データの扱いの際には、プライバシーを守り、個人情報の漏洩を防ぐために十分な配慮を行った。協力するか否かについては個人の意思が尊重されることも書面と口頭で説明を行った。

本研究は、東邦大学看護学部の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【研究２】高校生の親を対象とした研究

（１）調査研究のプロセス

【研究１】との比較を考慮して、育児を担う家族ケアラーとして研究１の対象者と同じ年代である、高校生を養育する保護者（母親）を対象とした。

都立 A 高校の協力を得て、A 高校の１～３年生の保護者（主に母親）を対象とした。生徒にも質問紙調査を実施し、親子 SOC の分析のため、親子の調査票に共通の番号をナンバリングし、マッチング可能にした。

（２）対象と方法

・調査期間：2016 年 12-2017 年 1 月
・調査対象：都内の都立 A 高校に通う１～3 年生及びその保護者
・調査方法：生徒は学内で設置した回収箱に

て回収、保護者は郵送法を用いた。双方ともに無記名自記式質問紙調査とした。

（３）倫理的配慮

研究１と同様、プライバシーへの配慮は十分に行った。親子でマッチングさせるため、親子の質問紙には共通の番号を充てたが、個人名や学籍番号と番号は一致させていない。

本研究は、東邦大学看護学部の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

【研究１】口唇口蓋裂児の家族ケアラーを対象とした研究

（１）回答者の属性

296 名（57.6%）から回答があった。

①母親（家族ケアラー）

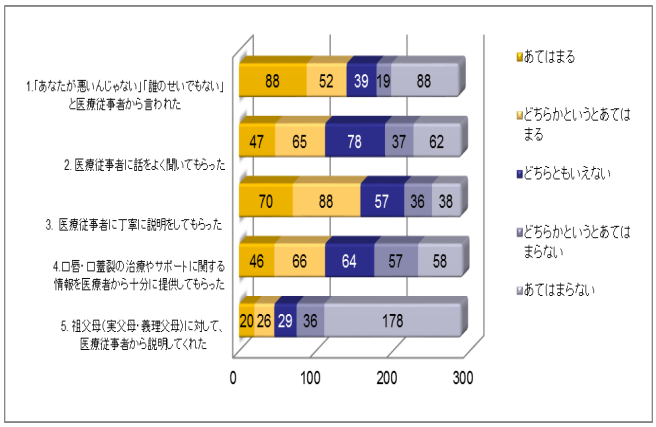
平均年齢は 49.9±8.9 歳、慢性疾患ありが 20.8%（61 名）であった。就労は、非正規雇用（パート等）が 44%（128 名）、正規雇用 24%（69 名）、無職 32%（91 名）であった。婚姻状況は 95%(279 名)が既婚、離別は 3%（9 名）、死別は 2%（6 名）であった。SOC の平均スコアは 42.3±7.7 点だった。

②子ども（口唇口蓋裂児）

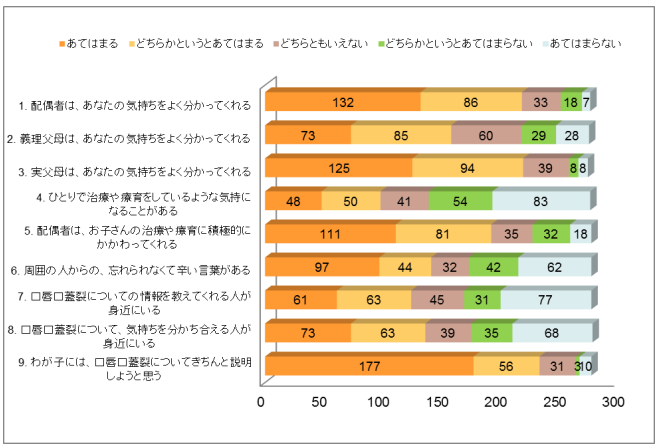
男性（児）55.7%（162 名）、平均年齢は 18.7±9.4 歳であった。口唇裂と口蓋裂を両方持つ子どもが 76.4%（207 名）であり、合併症ありは 21.5%（62 名）であった。

（２）家族ケアラーの経験：単純集計

①医療従事者からのサポート



②育児に関するサポートと経験



③児の養育を通して得られた肯定的変化

（Perceived Positive Change: PPC を用いて測定）

N=269	否定的変化	どちらともいえない	肯定的変化
精神的強さ	11 (3.7%)	42 (14.3%)	241 (82.0%)
人生を乗り越えていく自信	8 (2.7%)	63 (21.4%)	223 (75.9%)
生きがいや人生の楽しみ	22 (7.5%)	83 (28.3%)	188 (64.2%)
人や社会のために役立ちたいという思い	9 (3.1%)	81 (27.9%)	200 (69.0%)
物事に対する考え方	22 (7.6%)	126 (43.6%)	141 (48.8%)
日々への考え方	5 (1.7%)	75 (25.9%)	210 (72.4%)
家族との絆	8 (2.8%)	65 (22.5%)	216 (74.7%)
友人との絆	23 (8.0%)	161 (55.9%)	104 (36.1%)
信頼できる友人知人	32 (11.1%)	118 (41.0%)	138 (47.9%)
健康への関心	14 (4.8%)	72 (24.8%)	204 (70.3%)

（２）分析結果

SOC を従属変数とした重回帰分析の結果

地域への信頼感（ソーシャルキャピタル）、医療従事者ならびに身近な人との情報や情緒的サポートの受領が、高い SOC や肯定的変化（Perceived Positive Change: PPC)と関連した。また、「周囲の人からの忘れられなくて辛い言葉がある」という経験が、SOC の低さと有意な関連を示した。SOC の向上に向けて、成長感を得られるような経験を得たり環境を整えるといった介入が考えられる。

【研究２】高校生の親を対象とした研究

（１）回答者の属性

調査日に出席した全生徒 671 名に配布した。

①保護者：203 通（回収率 30.2%）

平均年齢 47.4±4.4 歳であり、慢性疾患ありが 20.1%（41 名）であった。就労については、非正規雇用（パート等）が 59.8%（122 名）、正規雇用 24%（49 名）、無職 14.2%（29 名）であった。婚姻状況は 86.8%(177 名)が既婚、離別は 11.3%（23 名）、死別は 0.5%（1 名）であった。SOC の平均スコアは 42.7±7.6 点だった。

②生徒：638 通（同 95.1%）

回答は 1 年生が 35.7%（225 名）、2 年生 32.4%（204 名）、3 年生 31.8%（200 名）であった。性別は、男子が 47.7%（300 名）、女子は 52.3%（329 名）であった。ストレスや精神的な問題で困っていると答えたのは 29.9%、SOC 平均スコア 37.31±6.8 であった。

（２）分析結果

母親の SOC と高い相関を示したのは、ソーシャルキャピタル（安心・安全な地域で暮らしているという実感、r=0.31, p<0.001）、家族関係の良好さを示す家族関係尺度における凝集性（家族間のコミットの程度が高く、お互いにサポーティブであること、r=0.431, p<0.001）、表出性（家族成員の行動や感情が

オープンであること、r=0.512, p<0.001)、葛藤性（怒りや攻撃の表出、r=-0.406, p<0.001）であった。また、母親の SOC は子供に関する悩み（子どもへのかかわり方、子どものライフスタイル、将来の職業に関する悩みなど）と比較的高い相関を示した（r=0.211～0.395, p<0.001～0.003)。

母親の SOC 合計スコアと子どもの SOC 合計スコアとは、2 変量間の相関としてはみられなかった。しかし、子ども自閉症スペクトル指数のスコアにおいて、子どもの注意転換に関する特徴（一度に 2 つ以上のことをするこができない、物事を自発的に楽しむことが難しいなどの項目）の点数の高さと、母親の SOC における有意味感（r=-0.160, p=0.026)、把握可能感（r=-0.151, p=0.034）にマイナスの相関が見られた。以上から、子どもの特性と母親の SOC が関連している可能性が考えられ、母親と子どもへの双方への支援が必要であると思われた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　4 件）
①大宮朋子.逆境下成長とストレス対処力 SOC　－口唇口蓋裂児の母親への調査から－ 第 74 回日本公衆衛生学会 2015.11.5 長崎ブリックホール（長崎県長崎市）

②大宮朋子,山崎喜比古.口唇口蓋裂児の母親における逆境下成長とストレス対処力 SOC の関連性の検討. 第 24 回日本健康教育学会 2015.7.15 前橋市中央公民館（群馬県前橋市）

③大宮朋子,山崎喜比古.障がい児の母親における養育過程の主観的経験と地域ｿｰｼｬﾙｷｬﾋﾟﾀﾙがストレス対処力 SOC、GHQ ならびに肯定的変化（PPC）に及ぼす影響－口唇口蓋裂児の母親を対象として－. 第 41 回日本保健医療社会学会　2015.5.16　首都大学東京荒川キャンパス（東京都荒川区）

④大宮朋子,山崎喜比古.口唇口蓋裂児の母親の精神健康およびストレス対処力 SOC に関連する要因の検討. 第 79 回日本民族衛生学会 2014.11.22　筑波大学（茨城県つくば市）

〔図書〕（計１件）
①Omiya T, Yamazaki Y, Shimada M, Ikeda K, Ishiuchi-Ishitani S, Ohira K. Difficulties and coping strategies experienced by employed people with HIV in Japan: a qualitative study comparing high and low Sense of Coherence groups. HIV/AIDS-Contemporary Challenges. INTECH,2016. pp.83-103. DOI:10.5772/65775,査読有。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

６．研究組織
(1)研究代表者
大宮朋子（OMIYA, Tomoko）
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：90589607

(2)研究分担者
山崎喜比古（YAMAZAKI, Yoshihiko）
日本福祉大学・大学院社会福祉学研究科
医療福祉学研究科・教授
研究者番号： 10174666

(3)連携研究者
該当者なし

(4)研究協力者
小島一郎（KOJIMA, Ichiro）
宮達彦（MIYA, Tatsuhiko）
出口奈緒子（DEGUCHI, Naoko）